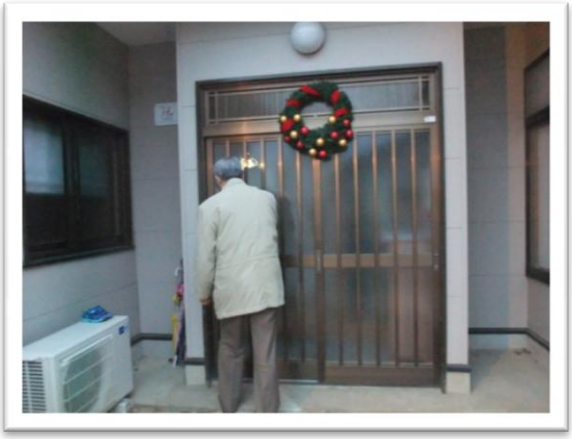
■青葉学園への訪問

続いて、福島市の郊外、吾妻山山麓へ青葉学園を訪ねました。周囲には桃や梨の畑が拡がっていて、春には果樹の花々が一斉に咲き乱れ、夢のように美しい風景に包まれるそうです。「今年は寒くてもう何度か雪が散らつきました」とのことでした。

＜青葉学園について＞

現在ここで暮らしている子どもは、2 歳から 18 歳までの 53 人。私が訪ねた翌週には、もうひとり 2 歳の子どもが入所する予定だと伺いました。その 7 割が虐待を受けていた子どもたちです。

青葉学園



「家」の玄関（後ろ姿は園長の神戸先生）

園長の神戸信行先生が園内を案内してくださいました。

こちらの施設の特徴は、小さな「家」をいくつも敷地内にもち、6～８人程度の異年齢のグループや、高校生のグループなど、それぞれの子どもにとっての「良い環境」で暮らせるよう、工夫されていることです。各グループには担当の「お姉さん」（職員）がいて、建物の二階に住み込みで生活しています。こうした形式は「小舎制」と呼ばれていますが、園長の神戸先生によれば、「昔ながらのやり方をしていたら、今はそれが一番新しくなってしまいました（笑）」とのことです。

室内も一般の家庭のような雰囲気が大切にされています。各々のグループホームで本格的な調理はできませんが、ごはんや味噌汁など簡単なものは各部屋で用意し、調理室でつくったおかずを運んで、それぞれの「家」ごとにテーブルを囲んで食事をしているそうです。

室内のようす

食卓

＜放射性物質との闘い＞

この日の放射線量は 0.226 マイクロシーベルト（やや低め）

原発事故からずっと、青葉学園は高い放射線量に苦しめられています。園庭の空間線量は高さ 1 メートルでも 0.5 マイクロシーベルトを超えていました。また、水の流れにより放射性物質が濃縮されて、子どもたちの居室のすぐそばにある洗濯物干し場の線量は、1 マイクロシーベルトを超えてしまっていたそうです。

建物を高圧洗浄機で洗い、今年 11 月から大規模な除染工事を始めました。園庭の表面の土ははぎ取り、砂場の砂も入れ替えました。また、洗濯物干し場はコンクリートで固めて、水を側溝に流すよう造り替えたそうです。「流れていった放射性物質が消えてなくなるわけではないのですが、子どもからは遠ざけなければならないという一心でやっています」。それでも、施設周りの空間線量は、今も 0.25 マイクロシーベルト前後で高止まりしていると言います。「どれだけやってもこれ以上は下がらないのです」と神戸先生は悔しそうにおっしゃいました。子どもたちの外遊びは、今も 1 日 1 時間までに限られています（※現在の数値は、福島市内ではむしろ低い方だということです）。

子どもが遊ぶ園庭などの除染費用は国や県に申請して認められました。しかしそれ以外にも、洗濯物干場や通学路など線量の高い箇所が多く見つかっています。それら自己負担で行わなければならない除染には高額の資金が必要であるため、現在、広く支援を呼びかけています。手つかずの場所もまだ多く残り、今後も濃縮などによって除染が必要な場所は増えていく可能性があります。「ひとつひとつ対処していくしかないですね」。先生はきっぱりとおっしゃいました。

施設の裏に回ると、そこには、除染作業で出た汚染土が高く積み上げられたままでした。

改修されたばかりの洗濯物干し場

増え続ける汚染土が敷地の隅に

＜内部被曝を防ぐための取り組み＞

プレハブの食品放射能測定室

ベラルーシ ATOMTEX 社製
NaI シンチレーションスペクトロメータ

青葉学園では今年 3 月、日本キリスト教海外医療協力会から放射能測定室の寄贈を、また、日本ルーテル教団から食品放射能測定器の貸与を受け、福島県内の児童養護施設では初めて、食品の安全を確かめる放射能測定を始めました（検出限界は 5 ベクレル程度）。現在は毎食後に子どもたちの食事の丸ごと測定（※1 食あたりのベクレル値を測定）を行うほか、気になる食材の測定などを行っていて、近隣で必要とされる方にも利用してもらっているとのことです。

「地元産の食材であっても検出されることはほとんどありませんが、放射性物質が目に見えない以上、ひとつひとつ確かめて自衛していくしかありません。今、こうした機器がすべての児童養護施設に設置されるよう働きかけているところです。施設の子どもは学校給食以外のすべての食事を施設内でとるのだから、当然必要なことだと思います」。

＜前を向いて進む＞

現在青葉学園では、老朽化していた児童棟の一部を耐震化する改築工事が行われています。春には完成するこちらの建物では主に高校生など年長の子どもたちが生活する予定で、2 人 1 部屋で真ん中をアコーディオンカーテンで仕切って個室のように使うこともできるそうです。「プライベートな空間をもつのが難しい集団生活ですが、ほどほどの距離感でひとりの空間をもてることが必要な子もいますし、子どもは皆大きくなれば自分の部屋をもちたいと思うものですしね」と、副園長の神戸まり子先生がおっしゃいました。

今回のクリスマスプレゼントである寄付金で購入したいとおっしゃっていたベッドは、こちらの建物で使うためのものだということです。園長先生にお渡ししたところ一瞬言葉を失われ、「…これだけあれば、子どもたちのベッドをたくさん買うことができます。こうしたご支援があるから、私たちは前を向いて進んでいけます。ほんとうに皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです」と、おっしゃいました。

改築中の児童棟

事務長の油井幸子さんと 園長の神戸信行先生

駆け足ではありましたが 2 つの施設を訪問して、改めて多くのことを考えさせられました。

家庭という「居場所」を得られずにいる子どもたち。そして、原発事故の被害者としての子どもたち。そのどちらも、私たちがつくっているこの社会の”ひずみ”が生み出しているのだということを、改めて強く思いました。

「すべての子どもに等しく未来がひらけますように」

私たちにできることはごくわずかでしかありませんが、厳しい現実から目を背けずに、これからも２つの施設と関わりを持ちながら、何ができるか考え続けていきたいと思います。（事務局・矢野）